森林レンジャーがゆく（67）

シカは神様？

縄文時代は、原始農耕が文化として発展していなかったため、人々の糧は狩猟採取が基本でした。そして、イノシシ、カノシシ、アオシシの３種の動物が縄文人の胃袋を満たす貴重な食料でした。辞書にも「シシ」の意味として食用の獣肉と記述されているものもあります。縄文遺跡からは、シシ類の頭骨が祭礼に使われたと思われる形で見つかっています。シシは貴重なタンパク源として人々の暮らしを支えていたため、神様として信仰の対象にされていたと考えられています。特にイノシシは、多産のため繁栄の象徴と考えられていました。また、「一番おいしい肉」（いの一番の肉）という意味でイノシシといわれるとの説もあります。カノシシとはシカを表していますが、今ではなかなか耳にしない言葉だと思います。しかし、カノシシの「カノ」は、現在でも「カノコ（鹿の子）模様」のように子鹿の斑点を表す言葉として残っています。シカは、毎年生え変わる角を持つため、農耕（毎年種付ける）と結びつき、神鹿（しんろく）として、奈良公園のシカのように大切にされています。

アオシシについては、ニホンカモシカを指すといわれています。このように縄文時代のシシ類は、「豊かな食料」＝「繁栄の神様」として信仰されていたようです。

シシ神様のような袋角（若角）のニホンジカ

しかし、時代が農耕を中心とする生活に移ってくると、畑を荒らす害獣として扱われ、神様として崇められることも少なくなりました。先人たちは畑地を守るためにシシ垣と呼ばれる石塁や土塁を築いて、野生動物と対立するようになりました。ある映画に「シシ神様」として大鹿のようなキャラクターが登場します。かつては、森にすむ動物たちが神様と呼ばれていましたが、農耕が生活の中心になると人や畑を守る生き物が神様と呼ばれるようになってきました。森の動物たちが、人の役に立ち、再び神様として崇められ、共存する方法が見つかればと考えています。（杉野）